

# 震災体験伝え共有

## 日米の高校生が意見交換

気仙沼



県内と米国の高校生が2月25日、気仙沼市の東日本震災について意見交換するプロジェクトを担う人材育成を目指す「一般財団法人教育支援グローバル基金(東京)の事業「ビヨンドトウモロ」の一環。

石巻市など沿岸部の6人と、米国ボストン市の11人が参加。被災した街を視察した後、意見を発表した。

仙台育英学園高1年菅原彩加さん(16)は、石巻市は、がれきの中で動けずにいた母を助けられなかった体験を語り、「つらい思いをしている子どもたちを助ける仕事をしたい。国際ボランティアにも取り組みたい」と述べた。

米国から参加したバー  
震災を通して考えたことを  
発表する日米の高校生

チエル・マックさん(17)は「菅原さんの話に心が痛んだ。一人一人の体験談を多くの人に伝えたい」と話した。

気仙沼市大島出身で、自宅が流された仙台育英学園高3年小野寺栄さん(18)は「震災の記憶を風化させてはいけない。一時的ではなく長期的な支援の必要性を海外に発信し続けることも必要だ」と強調した。

Boston Boys and Girls Club / BEYOND Tomorrow Kesenuma Program  
- U.S. students visit disaster areas



東陵高生と交流するアメリカの中・高生たち

# 被災体験聞く

米国の  
中高生 東陵高で交流

日本の文化を学んで  
いるアメリカのポスト  
ン・ボーイズアンド・  
ガールズクラブの中・

高生たちが24日、東陵高校の生徒たちと交流。学校生活を見学したり、被災した生徒の体験談などに耳を傾けた。

道師役となり、被災や復興の情報発信を行う「ビヨンドトウモロー・アンバサダープログラム」の一環。同クラブの14〜18歳の生徒たちと、同校の生徒11人が交流した。校舎や部活動の様子を見学したアメリカの生徒たちを前に、3年の木皿圭祐君が「交通手段や連絡が取れず、1週間後に自宅のある南三陸町に帰った。何もかもが無く、想像を絶する被害に呆然とした」と報告。

藤本朱子さんは「震災直後に被災者が次々に避難してきたので、ボランティアに汗を流した。友達と毛布1枚でその日の夜を過ごした」などと震災当時の状況を語った。アメリカでの震災に関する報道は、福島第1原発の状況がメインで、津波被害の報道は少なかったという。

ウアーシュ・マックさん(17)は「震災に負けずに笑顔で過ごすみなさんの姿に、心を打たれた。ポストンに帰って、気仙沼の現状を伝えていきたい」と話していた。この日は、市民とも交流した。一行は、25日まで滞在し、被災した高校生から直接被災地を案内してもらった後、体験を発表し合った。

Boston Boys and Girls Club / BEYOND Tomorrow Kesennuma Program

- U.S. students visit disaster areas

# 東日本大震災 明日への 掲示板



合唱の練習に励む日米の生徒たち(24日、宮城県気仙沼市で)

## 米高校生、被災地と交流

米国マサチューセッツ州の高校生11人が24日、宮城県気仙沼市を訪れ、地元高校生と交流した。

震災遺児らの支援団体「ビヨンドトゥモロー」(東京)が被災地の現状を知ってもらおうと企画。米国の生徒は、「津波はどんなものなのか」「今大変なことは」などと質問。気仙沼の生徒は、被災体験や今の暮らしなどを答えた後、英国人音楽家のジュリアン・レノンさんとニック・ウッズさんが被災地を思って歌った曲「HOPE」を一緒に合唱した。東陵高2年、遠藤亮子さん(17)は、「遠くで被災地を

思ってくれる人たちがいるなんて」と笑顔で話した。